医療保育科におけるオペレッタ授業の実践報告

秋政　邦江，尾崎　公彦，青井　則子，伊藤　智里

Introduction and Practice of Student Operettas in the Department of Nursing Childcare

Kunie AKIMASA, Kimihiko OZAKI, Noriko AOI and Chisato ITO

キーワード：医療保育研究，表現，医療保育，保育士，幼稚園教諭

概　　要

K医療短期大学医療保育科は2005年に医療・福祉の基礎知識を有した保育者を養成するために設立され，3年課程の特色をもっている．資格としては，保育士資格と幼稚園教諭二種免許状が取得できる．将来保育者となるには保育所保育指針や幼稚園教育要領の内容理解が必須になる．これらには，表現領域の内容目標として「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする」と掲げている[1]．そこでオペレッタ制作をすることにより保育者に必要な資質としての「表現力」をより向上させ，さらに制作過程で経験する協調性・共通理解などを通してコミュニケーション能力の育成をはかる目的でオペレッタを制作し，実演する授業を行なった．本研究では制作したオペレッタの発表後に学生が気づいたことや学んだことを記述したものが，「共同制作」「自己実現」「作品」「人間関係」の4つのカテゴリーに分類できた．学生が作品の発表会をすることで努力してやりとげる事の楽しさや達成感を学んだことを報告する．

1．緒　　言

近年，核家族化や女性の社会進出により保育のニーズは高まっている．それに加え，さまざまなケースに対し柔軟な対応が求められている．保育所保育指針第13章に「保育所における子育て支援及び職員の研修など」の保育所の機能や役割は保育所の通常業務である保育の充実に加え，さらに一層広がりつつある．また障害児を一般の保育園で預かるケースや病気の子どもを預かるなど，受け入れる子どもの多様化に伴い，保育士に新たな能力が求められている．病気の子どもはもちろん，現在では0歳児保育を実践する保育園には，看護師をおくことが望ましいとされている[2]ようにデリケートな0歳児保育には医療知識は不可欠である．また，増加が心配されている発達障害児に対しても，現場では専門知識を持った人材が求められている．これらのことから将来の保育者像として医療や福祉の基礎を学んだ保育士が必要とされている．多様化する保育ニーズに対応するためには，柔軟な思考力を持ち，豊かな感性を有した保育者の養成が求められている．

しかし現代の学生は，長根らが述べているように[3]，生活経験の不足，人間関係の希薄さ，精神的な弱さなどの保育者以前の一人の人間としての問題点を抱えている．本科学生も同様の問題点が垣間見られる．この

（平成20年10月15日受理）
川崎医療短期大学　医療保育科
Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

ような学生たちが求められる保育者としての力を備えるためには，オペレッタの制作を通して経験することは非常に有用であると考える．

オペレッタを制作し実演することは，集団での活動を意味し，個人のスケールを超えた作品作りの体験である．結果として，コミュニケーション能力や問題解決能力を高めるには効果的であり，他者を理解し意見の共有を図る事ができる．それらの経験が，もっとも大切な保育の心（豊かな心情や感性）を育てる事ができると考える．

2．医療保育研究（表現）の目的

身体表現・造形・音楽・言葉（脚本）の分野を総合的に捉えて，創作活動に取り組むことにより，保育者に必要な感性・想像力・表現力・技能を養う．また，集団での創作活動を行なうことにより，達成感や成功体験を積ませ,制作活動することの困難や喜びを学び,子どもと共に表現を楽しみ豊かにできる保育者を育成することを目的とする．

3．研 究 方 法

1）調査対象と方法

K医療短期大学の医療保育に学ぶ3年生77名のうち反省会出席の67名（87％）を調査対象とした．

調査実施については，口頭でアンケートは調査・研究目的のために行なうものであり，調査後の用紙は適切な方法で処理することを述べ，本人の同意を得て無記名で行なった．

2）方　　法

実施期間は平成19年4月～7月までの15回（1回180分）である．オペレッタを制作するために学生を11～12名の6グループに分けた．男子学生は作為的に各グループに1名ずつにし，女子学生は新たな人間関係を構築するために無作為のくじ引きを行なった．各グループは既成のオペレッタを一つ選び，以降は各グループで，身体表現・造形・音楽・脚本の4つのパートに分けて，担当責任者を設けて作業をすすめた．脚本には医療的な部分をいれ，1回～3回の授業でアレンジを行ない，オリジナルなものにしていった．各グループの作品は表1の通りである．

① 作品のテーマ（目的）を考える．（表1）
② 役割のフローチャートを作り，責任の所在を明確にする．
③ 表現したい目的を設定し，大道具や小道具などの造形や脚本，音楽とダンスを入れたオペレッタを創造的に制作する．
④ 発表会を企画・実施する．

表1　作品テーマ

班	作品名	テーマ（目的）
1	白雪姫	意地悪をすると自分に返ってくる
2	おもちゃのチャチャチャ	みんなで仲良く遊ぶ！（友情）
3	ブレーメンの音楽隊	団結，協力の大切さ
4	二匹のオオカミと十匹の子ヤギ	約束を守る，家族の協力
5	オズの魔法使い	愛と勇気（大切なものは自分の胸のなかに）
6	スイミー	友情，個性，みんなが集まれば大きな力に

表2　授業計画

	Aクラス	Bクラス
1	総合演習（表現）についてガイダンス	
2	テーマの決定・役割分担等決定（資料収集）	
3	脚本作り	
4	脚本作り・音楽・振り付け	脚本作り・道具等制作
5	脚本作り・音楽・振り付け	脚本作り・道具等制作
6	道具等制作	音楽・振り付け
7	道具等制作	音楽・振り付け
8	稽古	稽古
9	稽古・制作等	稽古（通し稽古）
10	稽古（通し稽古）	稽古・制作等
11	リハーサル発表（B発表）	
12	リハーサル発表（A発表）	
13	案内状制作	修正・稽古
14	修正・稽古	案内状制作
15	発表会	

シラバス作成時点の筆者らの計画は表2の通りであるが，各グループの進度により，計画は適宜変更しながら実施した．授業の初回で，他大学のオペレッタを参考作品としてビデオ鑑賞した.自分達の発表会後に,各グループの発表ビデオを見ながら反省会をした．後日，各グループの制作記録を作成，提出させた．これをもとに医療保育研究（表現）の学習効果を考察する資料とした．さらに，発表後の感想を学生に1人5枚のカードを渡し,オペレッタを制作した中での学びと

気づきについて，カード１枚に１文書くよう指示した．これらを複数の研究者で，意味内容の類似性のあるもので整理した．そして，それらの整理された項目を項目相互の関連性を考えながらカテゴリーに分類した．

４．結　　果

回収した学生の学びと気づきについてのラベルは全ラベルは335枚であった．これらを類似したラベルを集めると18の項目に分類できた．「協調性」(88)，「楽しさ」(21)，「達成感」(17)，「心の変化」(15)，「責任感」(10)，「問題解決」(7)，「アイデア」(6)，「共通理解」(3)，「製作技術」(6)，「コミュニケーション」(49)，「身体表現」(31)，「総合マネジメント」(28)，「大道具」(6)，「音楽」(5)，「脚本」(3)，「積極的」(35)，「消極的」(3)，「理解」(2)であった．

次に18に分類した項目の関連性を考えながら図１のように⑴「共同制作（グループワーク）」⑵「自己実現」⑶「作品」⑷「人間関係」４つのカテゴリーに整理した．

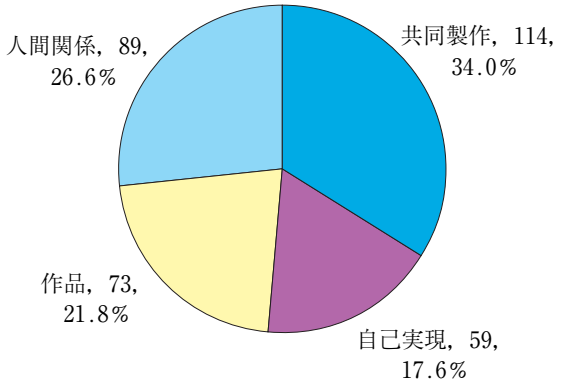

図１　カテゴリーの割合

表３の各カテゴリーについて以下に内容を概説する．

⑴　共同制作とは一つの作品を作るために力を合わせることである．オペレッタ制作において「友達と協力することが大事だとわかった」などの協調性は（77.2％）と多かった．次に共同制作にもっとも，必要な各個人の責任感（8.8％）・問題解決（6.1％）となっている．また，数値は少ないが，アイデア（5.3％）では「皆の個性とアイデアが集まってできた」と感じている．また「一つの考えを全員で共有する大切さを知った」など共通理解（2.6％）の難しさに気づいた．

⑵　自己実現とは自己の素質や能力などを発展させ，

より完全な自己を実現してゆくことを意味する．オペレッタでは「演技の楽しさを知った」など楽しさが（35.6％）と多かった．そして「『やったー！うまくいった』という気持ちを共感し，さらに良くしようと思った」など，達成感（28.8％），心の変化（25.4％）であった．しかし，製作技術（8.3％）での自己実現は少ない．

⑶　作品においては，身体表現（42.5％）で身体の静と動を通して人に思いを伝えることの難しさや演技する楽しさを学んだことが記されていた．また，総合マネジメント（38.4％）については，「計画をしっかり立てて取り組む事が大切」と感じている．学生達は発表会が近づくにつれて，放課後に残ることも多くなり，実習や私生活のマネジメントと時間調整が大変だった．さらに，大道具（8.2％）では「大道具や小道具を一つ造るにも，様々な技術や技法を知っている必要がある」．また，音楽（6.8％）では「音の演出の難しさを感じた」と述べている．脚本（4.1％）では「自分達で物語を作って工夫したりする楽しさがわかった」と記している．

表3　カテゴリー別の項目

カテゴリー	項　目	件　数	比　率
共同制作	協調性	88	77.2%
	責任感	10	8.8%
	問題解決	7	6.1%
	アイデア	6	5.3%
	共通理解	3	2.6%
	小計1	114	100.0%
自己実現	楽しさ	21	35.6%
	達成感	17	28.8%
	心の変化	15	25.4%
	製作技術	6	10.2%
	小計2	59	100.0%
作　　品	身体表現	31	42.5%
	総合マネジメント	28	38.4%
	大道具	6	8.2%
	音楽	5	6.8%
	脚本	3	4.1%
	小計3	73	100.0%
人間関係	コミュニケーション	49	55.1%
	積極的	35	39.3%
	消極的	3	3.4%
	理解	2	2.2%
	小計4	89	100.0%
	合　計	335	

(4)　人間関係とは社会・組織・集団などにおける人と人との関係，特に個人と個人との心理面・感情面での関係をいう．学生達は「今まであまり話したことがなかった人とたくさん話すことができ，仲良くなった」「友達の大切さに改めて気づいた」など，コミュニケーション（55.1%）の重要性を認識するようになった．また「今まであまり関わっていない人とも親しくなれた」など積極性（39.3%）についての感想があったが，一方「皆の目標や，やりたいことをまとめる事や違う意見を言うことがいやだった」など，消極的（3.4%）な面や「一人ひとりのいろいろな面を発見した」など理解度（2.2%）で，相手に対しての心の動きや変化を感じたようである．

5．考　　察

研究の目的は，オペレッタ作品の制作過程と作品発表による表現内容（身体表現・造形・音楽・言葉（脚本））の学習成果を考察することである．

オペレッタ制作期間中は，発達障害児保育実習の最中であり，発表会が近づくにつれて，放課後に残ることも多くなり，メンバー同士の時間調整が特に大変だったようである．しかし，作品への個人個人の思い，こだわりなどをグループ内で話し合うことによりコミュニケーションの大切さや共通理解の難しさを学び，協力することの大切さに気づいた．朝野は学生が自主的に作業スケジュールを管理し，討議や共同作業を通して劇づくりを進める中で，コミュニケーションの向上が認められたと報告している[4]．本学科の学生も積極的に人とコミュニケーションを取ることにより，新しい人間関係を築くことができ，人と人のつながりの大切さを再確認した．また，学生は役になりきることにより，恥ずかしさがなくなり，生き生きとした表現ができるようになり，作品の発表会をすることで努力してやりとげる事の楽しさや達成感を学んだ．

オペレッタの演技やダンス技術面では，お互いに観て，意見を出し合いながら練習を行なっていた．また自分達のビデオテープを観て，立つ位置や声の大きさなど工夫することにより，演出効果があがることなどを学んだ．大道具の背景は，様々な表現技法を駆使し，演目に合った臨場感を創出した．合奏の練習を重ねる毎に，アンサンブルの楽しさが徐々に理解できる様になった．気持ちが一つになり，音で表現する楽しさも感じられる様になった．さらに，脚本には学生の出身県の方言を入れたり，心肺蘇生の場面を取り入れたりすることで独自性を出した．これら一連の作業から，皆で考えることによるアイデアや工夫の素晴らしさを学んだ．これらのことから，学生達はオペレッタの発表会をすることにより保育者として必要な「問題解決能力」・「コミュニケーション能力」を培ったといえる．

また，「他者との共通理解」により「個人スケールを超えた集団での作品作り」などが可能な事を学んだ．さらに達成感や成功体験を経験することにより，表現する楽しさを学ぶことができた．

今回のオペレッタ発表会は第1回目ということ，指導時間の制約もあり，十分な実践ができる環境を学生に提供できなかった．今後の課題は学生の制作記録を詳細に分析し，「総合表現」としてのオペレッタの制作の技術や知識を学生に効果的に指導することを検討したい．

6．引用文献

1）文部省編：幼稚園教育要領，東京：フレーベル館，p12，p71，2005.
2）保育法令研究会（監修）：保育小六法，東京：中央法規，2005.
3）長根利紀代：保育者を目指す学生への授業効果について（オペレッタを教材として），名古屋柳城短期大学研究紀要26：91―106，2004.
4）朝野典子：「表現活動の総合研究」（劇づくり）を中心とする教育プログラム（保育専門職としての表現力を育てる取り組み），日本保育学会60回：88―89，2007.